

## 川内大綱引（概要）

川内大綱引は、起源を戦国時代まで遡り、実に424年以上の歴史を現代に伝える薩摩川内市の誇る伝統行事です。

川内大綱引の起源は、薩摩の国を治める島津氏17代目当主島津義弘公が、合戦に向けて士気を鼓舞するために、家臣新納忠元にいろうただもとが始めたとも言われており、秋分の日の前日、今年は9月22日（金曜日）に国道3号向田側を舞台とし、綱の中心に設置した「ダン木」を境に上方かみがた（赤）・下方しもがた（白）に分かれ、およそ3,000人もの上半身裸の男達が激しくぶつかり合います。

川内大綱引の特色は、なんとと言ってもその綱の大きさと、普通の綱引きとは違うルールがある点です。

綱引で使用する綱の大きさは約長さ365m・重さ7t・直径40cmもあります。この大綱を作る作業を「綱練り」と言い、鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されており、1,500人もの人々が当日の早朝から半日かけ、昔ながらの道具・工法を用い、365本の荒縄を練り上げていきます。

この荒縄の材料の稲藁は、全て薩摩川内市内の農家の方々のご協力を頂き、藁を10月から準備し、薩摩川内市内で荒縄を作成しております。綱練りでの綱の出来具合によって、本番の大綱引の成功が左右されると言っても過言ではありません。綱練りは、長年の勘を培った職人技と参加する人々が一つになり、丹精込めて1本の大綱を練り上げます。綱練りの最後に川内大綱引の特徴の一つ「ワサ」と呼ばれるワッカを両端に作り完成です。まさしく人と原料ともに地産地消の薩摩川内市産大綱です。

川内大綱引は一般的な綱引きとは異なり、独特なルールで行われます。太鼓隊（太鼓隊一番から十番までである）の合図で大綱を引き始めますが、まず「引き隊」（綱を引く人達）を妨害する「押し隊」という人達がいる点が第一に挙げられます。押し隊を繰り出すことにより、相手の引き隊を妨害し勝負を有利に進めることができます。上方・下方双方の押し隊がぶつかり合う最前線の「押し隊」双方押し合い、地に足がつかず、上へ盛り上がってくるほどです。昔の人は、その様子を「龍が立つ」と言いました。まさに勇壮で、とても迫力があります。この押し隊の壮絶なぶつかり合いは壮大かつ勇敢です。

川内大綱引の主役は何と言っても、大変名誉ある憧れの三役です。引けの合図を出す太鼓隊を率いる「一番太鼓」、陣営の総指揮と全体を総括する「大将」、押し隊をまとめ上げ先陣を切って敵陣に突進する「押大将」です。

次に、中央に設置してある「ダン木」にワサを引っ掛ける事により、それ以上は引かれなくなるので、その間に作戦を練り態勢を整えることができます。この押し合い引き合いの駆け引きが、勝敗を決める要因となります。綱引開始からおよそ1時間半経過して、大綱の中心が上方・下方どちら側にあるかで勝敗が決まります。また、勝敗を決するときには、大綱に鋸を入れて切りますので、この大綱は一夜限りのものになり、昔から使用した大綱をそれぞれ家に持って帰り玄関などに飾り、家内安全、五穀豊穰、無病息災、商売繁盛のお守りなると伝えられ、子供を大綱の上に乗せると健康に育つと伝えられています。このように見どころ満載で、毎年市内外から多くの観客が詰め掛け、薩摩川内の夜は賑わいます。親から子へ、子から孫へと代々引き継がれ開催されてきた川内大綱引は、424年以上超える時と共に市民生活の一部として、地域のつながりを深める架け橋となっています。